

修士論文（要旨）

2022年1月

終助詞の用法と機能

— 「よね」を中心に —

指導 茶谷 恭代 准教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

220J3005

戴 広琴

Master's Thesis(Abstract)

January 2022

The Usage and Function of Japanese Sentence-final Particle: A Closer Look at Yone

Dai GuangQin

220J3005

Graduate School of Language Education

Master's Program in Japanese Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Chatani Yasuyo

# 目次

1.	はじめに .....	1
2.	先行研究 .....	2
2.1	「よね」に関する先行研究.....	2
2.2	これまでの先行研究の問題点.....	4
3.	分析対象とデータのとり方.....	5
3.1	対象とする言語資料.....	5
3.2	データの収集方法.....	5
4.	「よね」の実例の分析.....	6
4.1	分析の観点.....	6
4.1.1	聞き手が情報を持っていると想定されている場合.....	6
4.1.2	聞き手が情報を持っていると想定されていない場合.....	9
4.1.2.1	動詞「思う」と「よね」.....	10
4.1.2.2	「のだ」との関係について.....	12
4.2	「よね」の周辺形式との比較.....	13
4.2.1	先行研究の問題点.....	13
4.2.2	「よ」と「よね」の違い.....	14
4.2.3	「ね」と「よね」の違い.....	15
4.2.4	すべての形式のまとめ.....	16
5.	日本語教科書の分析.....	17
5.1	分析対象とする教科書の選定と分析の手順.....	17
5.2	各教科書における終助詞「よね」の導入と出現数.....	19
6.	終助詞「よね」の機能用法別出現数と運用面における問題.....	20
6.1	「よね」の機能別使用状況.....	20
6.2	各教科書における「よね」の提示のしかた.....	21
6.2.1	『できる日本語』について.....	21
6.2.2	『新日本語の中級』について.....	23
6.2.3	『標準日本語』について.....	24
6.2.4	『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』について.....	27
7.	日本語教育における終助詞の指導への提案.....	28
8.	まとめと今後の課題.....	32
	参考文献	

## 要旨

日本語母語話者の会話の中には、「ね」「よね」などの終助詞が男女の別なく広範に使用されるが、日本語学習者としての自身の経験を振り返ってみると、その指導は十分とは言えない。特に「よね」についてはほとんど注目されていない。終助詞は初級段階で導入される表現ではあるが、上級レベルになっても、適切に使用することが難しいだろう。すなわち、日本語学習者にとって習得しにくい一つの項目だと思われる。

終助詞「よね」に関する重要な先行研究は野田（1993）、伊豆原（1993）、深尾（2005）などが挙げられる。これらの先行研究を検討し、問題点としては、①「よね」は聞き手に知らない情報を提供する際にも用いられる場合もある。②「よね」は1人称主語の「思う」と共起しない」と矛盾する使用例も出てくること。③「よね」はいつも「話し手の不確かさ」を表現するとは限らないため、「よね」について再検討する必要があるという三つの点を指摘した。

そのため、本稿では、情報の在り方という観点から、会話や会話を想定したものとして、日本語日常会話コーパス、対談集、ドラマの字幕に現れる用例を対象にし、分析した。結果としては、話し手によって聞き手が情報を持っていると想定されている場合と、聞き手が情報を持っていると想定されていない場合という二つに分け、話し手によって聞き手が情報を持っていると想定されている場合では、①聞き手に直接関わることや、聞き手の方が確かな情報を持っていると見込まれる事柄への確認、②過去の共通経験の確認、③常識や一般通念の確認、④話し手の記憶から呼び起こされた情報の確認という四つの用法が母語話者の会話の中によく使用されることが分かった。母語話者の典型的な使用で一番多かったのは①である。聞き手が情報を持っていると想定されていない場合では、話し手の内心や体験、個人的な事件といった、聞き手には容易に知りえない種類の事柄を告白するような気持ちで表明する場合にも、「よね」を使うことができることが分かった。また、人称も含めて、動詞「思う」は「よね」との関係性を母語話者の会話例を検討することで、「よね」の役割を考察した。注目されるのは、個人的な考え方や知識などを伝える際には、「のだ」という形をとることである。

教科書分析からは初級・初中級・中級において終助詞「よね」は文法項目として取り立て教えることがほとんどなく、例文に現れる「よね」の用法にも偏った使用が見られ、それによる学習者は「よね」のある用法だけが過剰使用されたり、提示されていない用法を使用できないというような使用問題が予想されること、それにより学習者がなかなか「よね」を使いこなせない要因の一つだと指摘した。

そして、全教科書の分析結果を踏まえて、終助詞「よね」の習得を促すための改善案として、初級レベルではまず、話し手と聞き手の情報のあり方の観点から対立して教えやすい「ね」と「よ」を取り上げて、指導する。そして、母語話者の典型的な「よね」の使用頻度により、具体的な場面の設定とともに、1-①と1-②と1-④の順に導入し、練習問題としては、具体的な場面を設定し、繰り返し学習者をアウトプット活動させることを提案した。

しかし、今回は教材分析においては「よね」だけ分析したが、「よね」と同じように頻繁に使

用される「よ」や「ね」の提示の方法についても考察が必要であり、今後の課題とされる。また、今回の分析結果に基づき、実際に学習者がどのように終助詞を使用しているかを考察し、学習者の終助詞の習得上の問題を明らかにしたい。

## 【調査対象とした資料】

### <言語資料>

嬉野雅道、藤村忠寿（2020）『腹を割って話した』<完全版>、朝日文庫

日本語日常会話コーパス（モニター公開版）（CEJC）

「35歳の少女」全話 「99.9 —刑事専門弁護士—」 「相棒」9季、18季、19季全話

「ごくせん」3季全話

「先生を消す方程式」全話

なお、出典の示されていないものは、筆者の作例である。

### <教科書・教材>

『まるごと 日本のことばと文化 入門 A1 かつどう』2013年 三修社

『まるごと 日本のことばと文化 入門 A1 りかい』2013年 三修社

『まるごと 日本のことばと文化 初級1 A2 かつどう』2014年 三修社

『まるごと 日本のことばと文化 初級1 A2 りかい』2014年 三修社

『まるごと 日本のことばと文化 初級2 A2 かつどう』2014年（初版） 三修社

『まるごと 日本のことばと文化 初級2 A2 りかい』2014年（初版） 三修社

『まるごと 日本のことばと文化 初中級 A2/B1』2015年（初版） 三修社

『まるごと 日本のことばと文化 中級1 B1』2016年 三修社

『まるごと 日本のことばと文化 中級2 B1』2017年 三修社

『新版 中日交流 標準日本語 中級上』2008年（第二版）人民教育出版社

『新版 中日交流 標準日本語 中級下』2008年（第二版）人民教育出版社

『新版 中日交流 標準日本語 初級上』2005年 人民教育出版社

『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』2005年 スリーエーネットワーク

『新日本語の中級 本冊』2000年 スリーエーネットワーク

『できる日本語 初級』2011年 株式会社アルク

『できる日本語 中級 本冊』2013年（初版）株式会社アルク

『できる日本語 初中級』2012年 株式会社アルク

参考文献

- 大曾美恵子 (1986) 「誤用分析 I」 『日本語学』 5 卷 9 号 明治書院
- 伊豆原英子 (1993) 「終助詞「よ」「よね」「ね」の総合的考察—「よね」のコミュニケーション機能の考察を軸に—」 『名古屋大学日本語・日本文化論集』 pp. 21-34
- 伊豆原英子 (2003) 「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」 『愛知学院大学教養部紀要』 51 (2) 1-15
- 菊地康人 (2000) 「のだ(んです)の本質」 『東京大学留学生センター紀要』 25-51
- 高民定 (2011) 「日本語学習者の「よ」「よね」「ね」について—日本語初級・中級教科書の機能分析を中心に—」 『国際教育 (4) 』 11-23
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法④ 第 8 部モダリティ』 くろしお出版
- 野田恵子 (1993) 「終助詞「ね」と「よ」の機能—「よね」と重なる場合—」 『言語文化と日本語教育 (6) 』 10-21
- 深尾まどか (1999) 「終助詞「よね」について」 『日本語教育研究 / 長沼言語文化研究所編』 (38) 90-98
- 深尾まどか (2005) 「「よね」再考—人称と共起制限から—」 『日本語教育』 (125) 18-27
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版